

『竹取物語』「富士山の名の由来」(読解)

次の古文を読んで、後の問に答えよ。

中将、人々引きぐして帰りまゐりて、かぐや姫を、①え戦ひ止めずなりぬる事、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへ、まゐらす。ひろげて御覽じて、②いといたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず。③御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す。「④駿河の国にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふことも 涙にうかぶ我身には ⑤死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の薬に、又、壺ぐして、御使ひにたまはず。勅使には、つきのいはかさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。嶺にて⑥すべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまたぐして山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲のなかへたち上るとぞ言ひ伝へたる。

問一 傍線部①・⑤を現代語訳しなさい。

問二 傍線部②の解釈として適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 中将が、帝の様子を見てしみじみと思っている。

イ 中将が、かぐや姫のことを思い出して悲しんでいる。

ウ 大臣、上達部が翁を思いやっしてしみじみとしている。

エ 勅使が、遠方までの旅路を思つて悲しんでいる。

オ 帝が、かぐや姫のことを思つてしみじみとしている。

問三 傍線部③の内容として適切なものを選びなさい。

ア 双六 イ 音楽 ウ 賭博 エ 弓矢 オ 読経

問四 傍線部④は都から見て、どの方角にあるか。適切なものを選びなさい。

ア 東 イ 西 ウ 南 エ 北

問五 傍線部⑥の内容を過不足なく答えなさい。

【解答欄】

問一 ① ( )

⑤ ( )

問二 ( ) 問三 ( ) 問四 ( )

問五 ( )

『竹取物語』「富士山の名の由来」(読解)

次の古文を読んで、後の問に答えよ。

中将、人々引きぐして帰りまゐりて、かぐや姫を、①え戦ひ止めずなりぬる事、こまごまと奏す。薬の壺に御文そへ、まゐらす。ひろげて御覽じて、②いといたくあはれがらせ給ひて、物もきこしめさず。③御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す。「④駿河の国にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふことも 涙にうかぶ我身には ⑤死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の薬に、又、壺ぐして、御使ひにたまはず。勅使には、つきのいはかさといふ人を召して、駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。嶺にて⑥すべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまたぐして山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲のなかへたち上るとぞ言ひ伝へたる。

問一 傍線部①・⑤を現代語訳しなさい。

問二 傍線部②の解釈として適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 中将が、帝の様子を見てしみじみと思っている。
- イ 中将が、かぐや姫のことを思い出して悲しんでいる。
- ウ 大臣、上達部が翁を思いやっしてしみじみとしている。
- エ 勅使が、遠方までの旅路を思つて悲しんでいる。
- オ 帝が、かぐや姫のことを思つてしみじみとしている。

問三 傍線部③の内容として適切なものを選びなさい。

- ア 双六 イ 音楽 ウ 賭博 エ 弓矢 オ 読経

問四 傍線部④は都から見て、どの方角にあるか。適切なものを選びなさい。

- ア 東 イ 西 ウ 南 エ 北

問五 傍線部⑥の内容を過不足なく答えなさい。

【解答欄】

問一 ① (かぐや姫を戦い止めることができなかつたこと)

⑤ (死なない薬もなになりましたでしょうか。いや何にもなりません。)

問二 (オ) 問三 (イ) 問四 (ア)

問五 (手紙と不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすこと。)

(現代語訳)

中将は、人々を引き連れて（帝のところへ）帰ってまいって、かぐや姫を戦い止めることができなかつたことを、事細かに申し上げる。薬のつぼにお手紙を添えて差し上げる。広げてご覧になって、とてもひどくしみじみとお思ひになって、物も召し上がらず、音楽のお遊びなどもなかった。大臣や上達部をお呼びになって、「どこの山が天に近いか」とおたずねになると、ある人が申し上げる。「駿河国にあるという山が、この都からも近く、天にも近くございます。」と申し上げる。これをお聞きになって、

あなたに会うこともない（その悲しみの）涙に浮かんでいる私の身にとっては、死なない薬もなになりましょうか。いや何にもなりません。

あの献上した不死の薬に、また壺を添えてお使いの者にお与えになる。勅使には、つきのいわかさという人をお呼びになって、駿河国にあるという山の頂上まで運んでいけという旨をおっしゃる。頂上でやるべきことをお教えになる。お手紙と不死の薬の壺を並べて、火を付けて燃やせという旨をおっしゃる。その旨を承って、兵士達大勢を連れて、山へ登ったことから、その山をふしの山と名付けたのである。その煙は、まだ雲の中へ立ち上っていると言い伝えている。